慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

| Title | 新井白石の経済論 |
|------------------|---|
| Sub Title | |
| Author | 野村,兼太郎 |
| Publisher | 慶應義塾理財学会 |
| Publication year | 1933 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.27, No.8 (1933. 8) ,p.1035(1)- 1065(31) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19330801-0001 |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19330801-0001 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

部語田

號

月

1 最近發見せる福澤先生の 「續福澤全集」第一卷

福澤先生展覽會記事

巴里通信

(書評)林毅陸氏著「弘堂講話集」

塾報、 雜報、各地三田會、

圖書館記事

111

合

貞

平

井

記

者

記

者

動靜

維持會報告

一 年 份 圓參

四

金金金東京 二拾拾 74 带线线

國家の獨立自尊

各人其義務を盡せ

林

毅

友

幸

田

道

嘉

原

陸

塾 義 應 慶 □三•芝•京東 所行發

三田學會雜 誌 第 八

號

白 石 經

太 源

居に死んだ。彼が政治的に最も活躍したのは實永元年西丸御側衆支配を命ぜられた頃から、 時機に相應する。しかも白石が依然として壯年期の蜀氣を失はなかつたことは、 月幼將軍家繼の薨ずるまでどあつた。年齢を以つて云へば、四十八歳から六十歳に至る人生に於いて最も成熟せる る人生に於いて異とすべきである。 自石の社會的地位には目まぐるしい變化がある。父と共にその主家土屋家を去つてからの生活、 新井白石は明暦三年二月十日、江戸柳原内藤邸内土屋利直の假邸に生れ、享保十年五月十九日内藤宿六間町の閑 白石の經濟論は後に指摘するが如く、主としてこの時期に物されたものである。 老來退嬰的氣分の起るを普通とす 正德六年(享保元年)四 期田家に仕えて

新井白石の經濟論

〇〇三五

を得なかつたのである。こ のは止むを得ない。殊に紀州藩主吉宗の宗家を嗣ぐや、 った。この綱豊 出すに至つた。新主綱豐に厚き信賴を得るに至つたこと」、(こ) 綱豐の幸運とが白石の社會的地位を高めるに役立 ねた時代、 再び致仕し、次いで甲府侯徳川綱豐の儒員となる。そして始めて彼の社會的地位の發展し得る端緒を見 -即ち後の將軍家宜の信賴に基いて築かれた白石の地位は、家宜の死後暗雲に閉さるくに至つた 白石は退けられた。意を政治上に絕ち、 世を白眼視せざる

代の經濟論者を通じてかゝる政治的地位にあつて、論じた者は他に極めて少ない。即ち白石の經濟論はかゝる實際 的立場を背景とするものである。 かゝる時期に慕府主權者の最大なる信任を得た白石は少なからざる改革意見を抱懷してゐたのである。かつ德川時 時代の社會經濟論槪說」に於いて說明したから、こゝには省略する。ついて參照されたい。鬼に角元祿期の後を受時代の社會經濟論槪說」に於いて說明したから、こゝには省略する。ついて參照されたい。鬼に角元祿期の後を受 なつてゐた。なほ當時の社會狀態並びに經濟論についてはすでに本誌第二十五卷第九號に揭載せる拙稿「正德享保 財政は漸く困窮すると共に、町人階級の擡頭は著しくなつた。しかし他方幕府の諸制は漸く制度化せざるを得なく 年に至る足かけ四年の短日月であつた。しかし短くはあつたが頗る多忙多事であつた。元祿期の後を受け、 白石の社會的地位が最も高く、かつ有力であつたのは、云ふまでもなく、家宣將軍在職中、寶永六年より正德二 幕府の基礎は依然として確固たるものではあるが、こゝに幕政を一新すべき時期に遭遇してゐたのである。

白石の著作は極めて多い。殊に彼が未だ世に出でざる以前、一儒者として著せるもの、 又彼が政治的活動から際

退した後、専心著作に没頭してゐた間の著作は甚だ多い。GD しかしその純粹に經濟論として目すべきものは之に 反して甚だ少ない。その經濟論の大部分は實際政治上の必要から將軍家に建言したものである。從つてこれを一つ 實行せんとする努力に、白石の面目、性格を反影するところ大である。 の纒つた經濟學說と見ることは困難である。 しかしその實際的施設に理論的根據を求め、又他方その理論的理想を

あった。 申出を拒絕せる有名な話はよくその大なる抱負を示すものである。(四)彼のこの自負心のあまりに高きことが、や とが、當時の制度化の必要と相俟つて、儀式典例を尊重する傾向を强めた。彼の博識は學者としては極めて有用で がて彼をして成功せしむる所以であり、 あつたのである。 白石は當時の武士として全く儒教的教養を受けてゐた。 彼の矜恃は學者としては何等の妨げとならない。しかし政治家としては雨者共にその成功を妨げるもので 又孤獨ならしむる所以ともなつた。 叉武士としての自尊心も頗る高かつた。彼が河村瑞軒の 彼の記憶力の强く、研究心の旺盛なこ

與するに至つたのも全くこの要求に基くものであらう。彼の性格中にあるこの二個の矛盾はあらゆる方面にその影 で實踐を尊び朱子から離れたものと云はなければならない。彼が學究的生活に終始し得ずして、自ら實際政治に参 響を示してゐる。そこに彼の生活の苦悶が存してゐたと思はれる。 の學統は朱子學派である。 しかし彼は單なる一學究として滿足することが出來なかつた。その點に於いて確かに大なる野心家であつた。彼 しかし彼は朱子の理論的究明にのみ滿足し得ず、さらに進んで實踐に向つた。その意味

新井白石の經濟論

三〇〇三七

その性格の相違は如何ともなし難かつたのである。 才の人自石は順庵に依つて德を養ふこと少なくなかつたらう。しかしその包容力を學ぶことは出來なかつた。結局 鹿も白石を尊重すること大であり、白石も亦順庵に敬事した。(五)木門下に於ける白石は詢に一個の才人であつた。 した。彼が木下順庵に就いたのはその著「山形紀行」が順庵の寓目するところとなつたからであると云ふ。從つて順 彼の學歴はある意味に於いて獨學であつたと云へる。十七歳の時、中江藤樹の「翁問答」を讀んで發奮し經學を志

と見るべきものではない。 石の批評である。常に政治的立場に於いて盛衰相反せる徂徠に對する反感をも交へたものであつて、正當なる見解 て生民を愚し候か武士の面目となり候やうの天下の毒流し候も出來候か。」(も)これ徂徠の「孫子國字解」に對する白て生民を愚し候か武士の面目となり候やうの天下の毒流し候も出來候か。」(も)これ徂徠の「孫子國字解」に對する白 授の事など候ひしと聞へ候に、とかく今日大平之世の政事をも孫子の心得にて人を詭り欺き、みづからの私智を以いいいいいいいいいい **五に相手を無視せんとしたるが如くである。白石が佐久間洞巖に與へた一書に、近年かたはしばかり文字のよめ候 辭學の研究に依つて、後世の國學の發達に資するところ大であつた。(☆) 然るに時代を同じうせるこれ等兩大家は** 白石の敵手として、 なにやらむ聞へぬ事どもを申され候て、俗解らしきものかれこれ見へ候て、殊にさる一人孫子を以て自負し像 又當時の學界の大立物として自石に對峙せる者は荻生徂徠であつた。兩者とも古史又は古文 唯人並み以上の才學と野心とを有し、世と相容れざる矜恃の人の言である。

〜 る性格を有する白石が當時の時勢に會して、その日に日に非なるを慨嘆したのは當然である。凡與造の事あ その事をうけ給はる輩、 たかきもいやしきも、 おのノ - 身家の事をのみいとなみして、工商の類と心をあは

の事ども行はれがたき事になりしかど、またこのごろは、むかしの事のごとくになりけるにや」。この してゐた。唯彼の知已家宣の在世はあまりに短かつた。故に續いて彼は云ふ。「これよりのちは、年を追ひ、それら 國財をわかちとりしによれる也」。かゝる收賄その他の罪惡を一掃せんと彼は欲した。又一掃し得る自信を有

行されずに終つたものがある。しかし彼が理想とする改革の破綻を見ざる中に、その責任的地位を去つたことは、 弊を指摘慨嘆した者はひとり白石ばかりではない。殆どすべての論者が論じてゐる。唯直接幕府の責任的地位にあ 幸か不幸か俄かに斷定し得ざるところである。 つてこれを論じ、これが改革を計つたところに白石の議論の價値を高めるものがある。唯彼の多くの改革案の中質 き洞察力を以つて、 白石は家宣に依つて自己の改革を實現し、時弊を救済し得ると信じてゐた。彼はその博學を利用して、又彼の銳 理想社會の實現に努力した。彼の經濟論はかくの如き見地から書かれたものである。當時の時

位を占むべきものであるか。それ等の點を出來る限り明白にしようと云ふのである。素より白石の議論は個々の現 財政論とか、貨幣論とかに分かつことは、その議論の價値を幾分削減する恐れがある。吾人は全體として彼の真意 象につき個々に意見を發表せるものであつて、少しも全體的統一はない。しかし單にこれを幾つかの議論、例へば 本稿はかくの如くして遺された白石の經濟論が如何なるものであつたか。又德川時代の經濟思想中、如何なる地 相關的に個々の議論を綜合しなければならない。故に先づ彼の根本的立場を明かにすべきであるべた

家宣の白石に對する信任の大であつたことは多くの例に見られる。今その一例として、朝鮮使應接後、その新方

新井白石の經濟論

五(一〇三九)

り、我また事をあやまらんには、彼あやまりともなりぬべし、〇折たく柴の記」中卷)じき事かは、佛氏の説に一體分身とかいふなるは、我と彼との事也、彼あやまちあらんには、即ち我あやまちな事ならざれば其功全しといふべからず、今此一事によりて、かほどまでに事成し所の、むなしからんは惜かるま て、此たびの事をもて簗後守(白石)に命じたりき、かれかならず事をあやまたじ、凡百の事たゞその一つに至て 針に反對者少からず、白石が辭意を申出た時に、家宣が間部越前守詮房に云つた言葉に、我はじめ試むる所あり

- 金融 金遣 白石の著作については、日比谷圖書館篇「新井白石關係文献總覽」<<>大正十五年版Dを參照。 第五、四五一頁)。しかし實際上彼の政治的理想の行ひ得なくなつたことは、彼の最も遺憾とするところであつた。 吉宗時代となるや、白石は退けられた。彼は深く自ら愼み、政事を語ることを避け、自保に專念した。佐久間洞 **候事は、一身のためには當代の御恩は前世に倍々し候事にありがたき仕合に候。」〇「白石先生手簡」新井白石全集** とくにて、今に至りて一事の御奉公もなく候に、官祿共にありし御代のごとくにて老を送り候やらに被」遊被」下 や、これをたとへ候に疲たる馬に荷重く候て遠き道を行くべきに、忽にその重荷を人のためにおろされ候事のご 巖に與へし書中にも、「外人の見及ばれ嫔にほさきにはさこそ得意にて今日は失意にもこそ見へも申嫔は ん 事に
- (四组) また來りて大指を吞んとする所を、あげさまにさしきりたれば、.....一丈餘の大蛇の、唇の上より頭のかたまで かにあそびしものどもの中、池に足ひたし居けるに、小なる、蛇の來りて其足の大指を舐しきるあるが、‥‥‥ にもとめ得し宅地をもて學問の料となして、ものまなび給ふやうにと、某が心のやうに申せとこそ侍れといふ、 「當時天下に變なしなどいふ富商の子の、學ふ友となりぬる事出來しに、その子のいひしは、我父たるものゝ見ま ゐらせて、必ず天下の大儒ともなり給ふべき御事なり、我亡兄のむすめの候なるにあはせまゐらせ、黄金三千圓 御こゝろざしのほどわするべからず、我むかしある人の申せしことを聞しに、夏のころ靈山と

てさしきりし所なるが、すでに大きくなりしに至りては、一尺餘りの瓶とは成しなり、今我身まづしく窮りたれ けれ、・・・・・」で折たく柴の記」卷上、全集第三、三二一三頁) ば、人知れるものにもあらず、此身のまゝにて、そこの亡兄のあとを承け繼ぎなむには、その疵なほ小しきなる 一尺餘きられたるが、たふれ死したりといふ事あり、‥‥‥初其蛇の小しきなりしほどは、わづかにさすがをも もしのたまふ所のごとく、世にしらるべきほどの儒生ともなりなんには、 その疵は殊に大にこそなりぬべ

- 能五 「我も彼門(順庵)に出入る事の年を經しほどに、まさしく東脩の禮を執るにも及ばで、したしき師弟とはなりたる 也、されば彼門に年久しき高弟も多かれど、我をば常に其座の上につかしめられ、 におはしませし時に、薦寧せられしに至りたりけり、公同上二七頁) つひには文昭廟(家宣)の藩邸
- 金融六 徂徠に關しては拙稿「荻生徂徠の經濟論」(木誌第二十六卷第八號所載)參照。
- 金世出 「白石先生手簡」(全集第五、四四三頁)
- 「折たく柴の記」卷中(全集第三、六一頁)
- 白石の傳記に關する現代の重なる著作は、 足立栗園「新井白石」、上田萬年「新井白石」、 山路愛山、新井白石」、渡

邊修二郎「新非白石言行録」等がある。

新井白石の經濟論

さらに彼の經濟論を説明するに先立つて、その思想上の立場を少しく明かにして置く必要がある。勿論その前提と

上述せるところを以つてしても略と明瞭であるが、

白石が如何なる態度を以つて當時の社會を眺めてゐたかは、

して、

彼が徳川氏全盛期に於いて支配階級たる武士社會に生れ、武士としての教養を受け、武士として終始したこ (10回1)

べての武士と同じく、儒教的道徳に對してもむしろ無批判的にこれを受容れてゐたことも止むを得ない。 とを注意しなければならない。故に徳川氏の制度に對しては何等不安を感ぜず、疑惑を有たながつた。又當時のす

は、「近世の事體を論じ候はんには天下四民のうち百姓職人賣人ことん~く皆其利を利とし其樂を樂み候て武家方は ただ武家の難儀を弛められ候事尤これ御急務とは申すべく候」だからである。武士を中心として觀察せる彼の眼に の經濟論の主要なる問題は一に武士に闘するものに限られてゐると云つてよい。その豪商排斥論も、物價論も、儉 卑しめてゐたことは、前述せる河村氏との緣談に對する態度を以つてしても十分これを推測し得られる。從つて彼卑しめてゐたことは、前述せる河村氏との緣談に對する態度を以つてしても十分これを推測し得られる。從つて彼 り此難にから候とは申すべく候」と映じたのであつた。この かゝる境遇にあつて、彼の社會及び經濟に對する觀察が武家中心になるのは勿論當然である。町人を卑賤なり 又貨幣論すらも、武士の立場より論ぜられたものである。彼自身述ぶるが如く、「今日の御沙汰におゐては

ある。この政治上の權限を具體的に制度の上に表現せんと欲したのである。例の朝鮮使に對し將軍が日本國王と稱ある。この政治上の權限を具體的に制度の上に表現せんと欲したのである。例の朝鮮使に對し將軍が日本國王と稱 に於いては他の諸侯と同じく大々名に外ならなかつた。しかし事實上將軍として他の諸侯の上に君臨してゐたので の態度はその幕制改革意見に明瞭に現れてゐる。當時幕府は實際上政治上の權限を有してゐた。德川氏はその形態 かく白石の思想は武士中心であつた。さらに嚴密に云へば、幕府中心であつたと云ふことも出來よう。この白石 又その應接の儀式の變更もすべてとの理想を實行せんとしたその發端に外ならないのである。 3

自石が幕府の制度を改革せんと欲したのは全く彼の政治的理想から生じたものである。かつ幕府の盛時にあつて、

使について、白石は云ふ。「天和の時に行はれし所は、寛永の例によられしと見えるなり、我國のいにしへ、外國の その理想とするところが制度の整備にあつたことは當然であり、勢ひ文飾に流れる傾向が强い。加ふるに白石の趣 聖人の事業もなく候やらむ、周公の三百六十官の事しるされ候も周禮とこそ名づけられ候、・・・天高く地卑く候は に從はれもや候ひつらむ、與「於詩」立「於禮」成「於樂」とも見へ候ひき、 つたのである。 べきとていい。自己の要するに幕府の天下を禮樂に依つて完備しようと云ふのが、自石の政治に參與せる理想であ しかるべからぬ事も多かりぬ、百年にして禮樂起るといふ事もある也、今の時に及びて、これらの事をも議定ある 道はたち候はむにや。」ここ なく候はむには鴻濛未判の世にこそは候はむずらむ、天地すでにわかれたち候はむ後は禮なく樂なくしていかに人い、 禮の立ち候所にて天氣降り地氣昇は樂の敎に候、天子諸俟卿太夫士庶たゞく~儉をのみ宗とし禮の節文といふもの禮の立ち候所にて天氣降り地氣昇は樂の敎に候、天子諸俟卿太夫士庶たゞく~儉をのみ宗とし禮の節文といふもの れ候御答に禮を以てしめされ候き、叉邦を治め候事を問はれ候にも韶舞をもてしめされ候は禮と樂とにあらずして 家宣の氣質はその傾向を强むるに役立つた。幕府創設當時の質力主義に一轉向を示すものである。故に朝鮮聘 佐久間洞巖に與へし一書は一層明白である。孔門の人々常に從事せられ候業と申すは詩書禮樂の事 通じ考られし所也とも聞えず、たゞ其時に當りて、進止を取りし所なれば、國體において、 顔淵は好學を以て稱し給ひ候處に仁を問は

を漏らさゞるを得なかつたのである。〇四)禮樂尊重が奢侈文弱に流るゝことに對し、白石はしきりに辯解してゐる。 意を政治に斷ちたる白石も、 吉宗の極端な倹約政治に對し反感をもつてゐたのであらう。私信に於いてその一端

新井白石の經濟論

九(一〇四三)

き しかし白石の施設の中には無用不急の業と思はるくものも少なくない。朝鮮使來聘に際し、芝口門を建設せしが如 あまりに

禮樂の表面にのみ捕はれたものである。

むしろこの朝鮮使來聘問題を

重要視したそのことがすでにそ

「天生貧弱の人におゐてはいかなる御善政候とも其人の天命をまぬかれ候事はかなふべからず候」と云ふ。故に彼の 救濟すべしとするは、「世の風俗にひかれて貧弱に及び候人と其行修まらずして貧弱に至り候人」とである。こだ る者である。「天地人の三才始り候より此かた人の命數には貧富同じからず候事すなはち貴賤同じから ず候事のご る。又彼がかゝる貴賤貧富の差の多くを槪して一の運命と見做してゐる點に於いて同時代の諸學者と軌を同じうす 事は少給の歩行若侍の類迄上品の物共を用ひ候事更に貴賤の差別も見えわかず候」と云へるが如きはその一例であ 社會に於ける地位、官位の尊重は不知不識に彼の對社會の態度を決定するに至つた。「輕き輩の衣類結構に過候と存 白石の禮樂尊重論は又彼の社會觀を決定するものである。身分的階級の存在を是認することは云ふまでもないが 人の貴賤の品相たちて有ゝ之候はんうちはその貧富の品も相わかれざることを得べからず候」。故に

る觀察眼は少しく時代の雰圍氣から抜き出でんとするところあるやうである。例へばその著、J 采覽異言」や「西洋紀 ごに現れた觀察の如き、C・も)又その古代史研究に採れる態度の如き、CIO 何れも單にその鋭敏なる觀察力を示す かく觀察すれば白石の根本的立場はその時代の儒教的思想から一歩も出づるものではない。しかし白石の鋭敏なかく觀察すれば白石の根本的立場はその時代の儒教的思想から一歩も出づるものではない。しかし白石の鋭敏な 又近代的、 科學的方法を採用せるものである。その點に於いて白石の新時代の先驅者たる立場が表示

される。 の人物として蓋し止むを得ないであらう。後世にあつてこそ矛盾とも感ぜらるゝが、當時にあつては何等撞着する 省略する。 ところなかつたのであらう。吾人はむしろ先驅者として止むを得ざるものと解すべきであらう。 これ等の點についてもなほ論究すべきところ少なくないが、こうではあまり問題外に走る恐れがあるから 唯以下述ぶる經濟論に於いても、 この兩方の立場を相混淆してゐることが認められる。 かくの如き時代

(註一○) 「白石建議」」(拙篇「日本經濟學說史資料」一七八頁)

德富猪一郎氏はその著「近世日本國民史」元祿享保中間時代一五六頁に於いて、白石の「讀史餘論」の一節を引用し フノ官也共官有ル時ハ必其職掌アリ是ヲ名」之可」言言」之可」行トハ申ス也王朝旣ニ衰へ武家天下ヲシロシメシテ不」成ト又名」之必可」言也言」之必可」行也君子於」其言」無」所」荷而已矣ト見ユ夫所」謂大臣トハ人臣ニシテ君ニ仕 也君臣共ニ王官ヲ受ル時ハ其實ハ君臣タリト雖其名ハ共ニ王臣タリ其臣豈我ヲ尊ブノ實アランヤ義滿ノ世叛臣常 テ我ニ仕フル者ハ我事ニ從フベシト令セムニ下タル者豊心ニ服セムヤ且ツ我受ル所ハ王官也我臣ノ受ル所モ王官 て論じてゐられる。その引用せられたる箇所の全文は次ぎの如くである。「孔子曰名不」正則言不」順言不」順則事 テ一代ノ鱧ヲ制スベシ是即變通ズルノ餞ナルベシモシ此人ヲシテ不學無術ナラザラシメバ此時漢家本朝古今事制 仕テ是ヲ名付テ昵近トシ其家禮トスト云へドモ僣黐ノ罪豈萬代ノ譏ヲ遁レンヤ世態スデニ變ジヌレバ其變ニヨリ 二絕へザリシハ其不德ノ致ス所ト雖且ハ又其君ヲ敬フノ實ナキニョレリ其上身已ニ人臣タリ然ルニ王朝ノ臣ヲ召 ヲ講究シテ其名號ヲタテ天子ニ下 三便アルベシ、公全集第三、五三四一五頁)。 ニシテ王朝ノ公卿大夫士ノ外ハ六十餘州ノ人民悉其臣下タルベキノ側 當時幕府の權勢强く、 太宰春臺の著と稱せら

れる「三王外記」の如き著作も現れるほどである。一般の思想が幕府中心的となるのも止むを得ない。

- (註一二)「折たく柴の記」翁中(全集第三、八〇頁)
- C註一三)「白石先生手簡」、全集第五、四三六一七頁)
- 金三四 九頁)。如何にも顧みて他を云ふの風がある。 も傳聞のよし申來候、一天下に名譽をひろめられ奇代の珍事、當時此人のうわさのみと申候」、〈全集、第五、四四 厭はれ候て、早速居住を移され、今は私宅の方角にさのみ遠からぬ境へなど承候、いかど候やらむ、京大坂より て三度迄御下し被反、いつれも熟讀めされ候事と、これはたしかに承候、如ら此之事につきいづかたぞにてうつ 之候、兵家者流の人にて弟子なども候と申候、書面の事もいかに人間に落候歟と存候に、御役人中見られ候へと 居候商人某方へ入來候もの候で平生をも下々と物語仕候と承候、其外にも一人 よ く存じ候とて物語し候人も有い **吉宗の倹約政治を批評せる有名なる山下幸內上書がある。これに對して白石は次ぎのやうな言をなしてゐる。『山** しとゞめられ候ものゝ人間に落候事と見へ候、此事につき歷々一見を望まれ尋來られ候て、門外之車馬斷ず候を 下廣内とか申す人の事も被三仰下二候、いかにもいかにも當時其沙汰のみに候、いまだわかき入と申候、同じ所に
- **註**三 の面々の衣服は綺麗に過候と申す物にて結構に過候と申すものにては無い之候、・・・むかしに引くらべ候に結構に 奢侈に關聯して白石の綺麗と結構との議論がある。一種の辯護論ともなるから、こゝに引用して置から。「貴賤の 過候と申すほどの事には無之候、たゞ同じ物を三四度とは著用もなり難きやうにて出仕の度々に新調の物を用ひ の所は衣服等の結構に候ばかりはせめてもの事に候、綺麗に候は以の外に不りの火然事と率く存候、近世以来御奉公 其ことばはちがひ候へども事は同じ事にて、又結構と申すと綺麗と申す事は其差別あるべき事に候・・・・・・某愚存 衣服の事世人の申す所は近年以來皆人結構に過候とも申し又は華麗に候とも申候歟、結構と申すも華麗と申すも

事と申すべく候云々」で、白石建議」一、資料、一八三一四頁) られ候へば、これは綺麗に過たると申すものにて候・・・・しからば近世の事よろしからざる事の第一は綺麗に過候

- (誰一六) 「白石建議」一、資料、一八四、一七八、一七九頁。元來白石は身分低き者から立身したのである。然るに晩年にはそ 御加増の入候とて埋れ居られ候人々多き事に候しかれば祿薄き人へかたづき候上よりは一生此身上にてよく候と 念之御役に撰ばれ候もとかく一石も祿の重きかたを撰ばれ候樣になり來りたとひ才覺行跡よく候ても少身なるは はなく候男子は其才徳によりいかにも身をも起す事もある事に候女子は夫次第のものに候處に近代のならはし一 の人の要になし候へばこれ又幸之至に候えどもすこしも縁の重く候人へと存候は全く身の昔をわすれ候ての事に の娘の結婚に相手の漩高さへも氣にしてゐる。その室鳩巢に與へた書簡に「御直參にて所領も地をも領し候ほど 覺悟仕候はねば每事につけ候て心もやすからず又それにつけ候ては親にて候ものゝふがひなく候故にかゝるめを 山はこれを以つて特に「彼れの思想は明かに階級的になり來れり」と云つてゐるが、〇新井白石」一六四十五頁)、む らし候て右のごとく少しも祿厚く候はむ人をと存じたるに候云々」(「白石先生手簡」全集第五、三八九頁)。山路愛 も見せ候などゝも存じ候へは父子之恩をもそこなふやりにもなり候ものに候故これ等の事を親の身にては存じ廻 しろ白石の人間らしさの現れ、親としての愚かさと見るべきであらう。
- 盆一也 白石の海外に關する知識はすべて關接的なものであるに拘らず、甚だ優れた觀察をなしてゐる。それについては 吉野作造。新井白石とヨワン・シローテ」等參照。
- (註一八) その一例。「凡天下の言には古言あり今言あり、其古今の間におゐて又その方言あり、その方言の中に又おの」 雅言あり、俗言あり、よく辨ふべき事なり」、C「古史通讀法凡例」全集第三、二一三頁)。又「凡我いふ所の是なる者 はこれに異なり、其事はすなはち質のみ、其義はすなはち正のみ好む所にありて曲げて説つくるべからず、即今

のごときに到りては斷じて是を採らず」つ古史通或問」上、全集第三、三一八頁) を徴となし據となして解くべきものをは解作り、疑ふべきものをは疑を傳ふ、あへて私の言を容れず、異端小説 錄せし所のごときは舊事古事日本紀及び古語拾遺等の書に出し所にして其事實に近く、其義やゝ正しと見ゆる所

Ξ

なくなかつた。しかし白石は實際に政治に參與してゐた關係から、それ等の根本的議論よりも、先づ實際に直面せ る經濟問題が主要なる對象とならざるを得なかつた。Clab 方町人階級の勃興を促がすと共に、他方土地よりの産物にその經濟的基礎を置ける武士階級の困窮を齎らしたもの に外ならない。 當時の社會狀態にあつて最も中心となつた經濟問題は武士階級の財政難であつた。要するに貨幣經濟の發達が一 従つて當時の論者の中には、例へば徂徠、春臺の如き、進んで社會組織そのものに論及する者も少

ば今國財の足らざる所、 ら近江守申行ひしさころなり、此内夏冬御給金の料三十萬兩餘を除く外、餘る所は四十六七萬餘なり、酒運上さいふもの六千兩、これ此內夏冬御給金の料三十萬兩餘を除く外、餘る所は四十六七萬餘なり、 の國用凡金百四十萬兩に及べり、此ほかに內裏を造りまゐらせらるゝ所の料凡金七八十萬兩を用ひらるべし、され 白石の當面せる問題は何であつたか。先づ幕府自身の財政難であつた。荻原近江守重秀の上申するところに依れ 家宣將軍就任當時、幕府の「御料すべて四百萬石、歳々に納らるゝ所の金は凡七十六七萬兩餘 此内長崎の運上さ いはんや、 凡百七八十萬兩に餘れり、たとひ大喪の御事なしといふとも、今より後に用ひらるべき國 當時の御急務御中陰の御法事料、御靈屋作らるべき料、將軍宣下の儀行はるべき料、 しかるに去歳

碊し置れし所なり、これより外に、國用に充らるべきものはあらず、たとひ今これを以て、當時の用に充らるゝと 金三兩を徴れしところ凡四十萬兩の內、十六萬兩をもて、其用に充られ、其餘分をば、城北の御所造らるべき料に に御わたましの料、 十分が一にも足るべからずといふ」有様であつた。cio 此內二十四萬兩は、去年の春武相駿三州の灰砂を除くべき役を、諸國に課せて、凡百石の地より、 此外内裏造りまねらせらるべき所の料猶あり、 しかるに只今御藏にある所の金わづかに三十七

ば今年の國用となさるべき所は、たとひ彼申す所のごとくたりとも、 その國用三十七萬兩と云ふを誤れりとなし、「彼申す所の去年用ひられし所の國財は、即是去々年の課稅なり、され 今や白石は將軍の下間に會ひ、目前の遣繰りをしなければならないのである。彼は近江守の上申の不備を指摘し、 を獲得せんとするにある。元祿の改鑄に依る利益は總計金凡五百萬兩と云ふ。しかし白石はこの方法を是認しない。 所の金三十六七萬兩とあはせて、總計一百十餘萬兩もあるべし」となし、又支出の方は全價を一時に支拂ふ必要な 勿論この計算は頗る粗枝大葉である。しかしもしこれが事實とせば、幕府財政は全く破産である。この救濟策と **荻原近江守は元祿年間に行ひたるが如き、金銀の制を改造するより外ないと云ふ。即ち悪貨に改鑄して利益** 年賦支拂を建言してゐる。二二 去年納められし所の七十六七萬兩と、今ある

ざるを得ない。白石は財政問題の根柢に通貨問題の横たはれることを知つてゐた。元祿の改鑄に依つて、 しかしこれは目前の急を救ふ方策に過ぎぬ。支出多く、收入これに伴はざる狀態にあつては常に財政難を來たさ 多くの悩

私は先づ彼の貨幣問題に闘する建議の中から、貨幣理論とも解すべき部分を取出して吟味して見よう。 みの生じてゐることを目撃してゐたゝめか、白石は通貨の品位を問題とした。白石は貨幣を如何に解してゐたか。

GE 13 した。これ等の點についてはすでに他の論文に於いて指摘して置いたから、こゝでは結論を述ぶるに止めて置く。 この物價騰貴に闘する限りに於いては品位は問題とならないと考へた。しかし現狀に於いては品位の改良を必要と 品質の低下共に物價騰貴に影響ありと認めてゐる。唯國家の統制が十分に行はれ、兩替商の橫暴を防止し得れば、 やの點に至ると頗る曖昧である。時に品位説を主張するかと思へば、數量說をも採用してゐる。彼は數量の增大、 白石は金銀を改鑄して、慶長年度に於けるものに復歸せんことを欲してゐる。しかし彼が何故に復歸を希望する

皆然り。骨のごときは、一たび折れ損じてぬけ出ぬれば二たび生ずるといふ事なし、金銀は天地の骨也、五行のうち木の器物等骨のごときは、一たび折れ損じてぬけ出ぬれば二たび生ずるといふ事なし、金銀は天地の骨也、五行のうち木とく、其餘の寶貨は、皆々血肉皮毛のごときなり、血肉皮毛は傷れ疵つけども、又々生ずるものなり、米穀布帛をはじ 金は骨也。これを探る後には、二たび生ずるの理なし」。<ニシ彼は通貨としての金を尊重したのではない。皮毛也、 も一言したるが如く白石が元祿改鑄の惡弊を目撃してゐたことも、彼が改善を鞏固に主張した理由の一つであらう。 しかし金そのものに對する特有の信仰的崇拜--を有してゐたこともその原因となつたであらう。凡金銀の天地の間に生する事、これを人にたとふれば、骨のご 上述の如く白石は何れかと云へば品位説に重要性を認めてゐない。しかし彼はかなり强く改善を主張した。前に -それは昔から人類の有せる一つの本能とも見るべきであらうが-

ならしむべしと云ふ意見を支持するに役立ち得る。 を支那思想の影響を受けた理論から崇拜したのである。 所謂拜金主義ではない。 しかしこの思想は金の品位を良質

不利の議論が生ずる。白石が金の國外流出を恐れ、長崎貿易を有害と認むる議論はその多くの述作に現れてゐる。 本朝寳貨通用事略」に依れば、わが國から金銀の外國に流出せることは、 これと關聯して問題とされるのは金を國內に保持して置かなければならないと云ふ意見である。從つて對外貿易

國へ入りし金銀の數はいかほどゝいふ事をしるべからず是一 「一慶長五年より前上古よりの事はしばらく論ぜず室町殿の代より信長秀吉兩代に至るまで西國中國の地より

六年が間我國の金銀外國へ入りし事いかほどといふ事はしれず是二 「一慶長六年の夏交趾の船來れり其船に乗しるのこれ當家に及びて海舶の來れる始なりこれより正保四年まで四十

をよせて商賣せしなり東國へも舶つきて商賣せし事もあり慶長十四年に上總大流 長崎より外にての商賣を禁ぜられし 事は寛永二年に始れりされば二十四年が間諸國の浦々にて外舶商賣せし時取り行し所の金銀の數はしるべ 「一慶長六年の夏外國の船我國へ來り始て寬永元年まで二十四年の間は九州の内いづれの浦々へも心のまま に舶 から

等の國々に年毎に行て商賣し此外にも私に行てあきなふこと年々に絕ず其時に我國の金銀を持ゆきし事其數いくら 「一慶長六年より 寛永十一年迄三十三年の間は御朱印船とて我國の商人ども・・・・ 亞馬港ノビスパン暹邏安南呂宋

新井白石の經濟論

一七 (10五)

といふ事しらず是四

れずこれらの國々へ持ゆきし金銀敷もまたしるべからず是五 **亞馬港などいふ國々より年々來りあきなひしたり其後耶蘇の法をいたく禁ぜられしより是等の國々來る事をゆるさ** 「一寬永の初迄は今來れる國々の外に、交趾、占城、安南、呂宋、ノヒスパン、 イギレス、 カレウタ、イタリヤ、

「一覧永の初耶蘇の法をいたく禁ぜられしより前かた三四十年が間我國にて其法を信受せしものども 年毎に其國 の師の許へ贈遣はせし禮物の金銀是は商賣いくらといふ事をしらず是六

「一近年に至りて長崎にて商賣の外私の商賣に抜け荷に外國へ入りし金銀の數しるべからず是七

「一慶長の初より今年に至て對馬國より朝鮮へ入りし金銀の敷いくらといふ事を詳にすべからず是八

「一古へより今に至て薩摩國より琉球へ入りし金銀の敷いくらといふ事を詳にすべからず是九」

六十一年間に、二億二萬二千八百九十九萬七千五百斤餘となると云ふ。CIBO 四十六年間に、 三年より寳永五年まで四十六年間の分)に達する。これから前掲未詳の分を推算すると、慶長六年より正保四年まで 三十九萬七千六百兩餘、銀三十七萬四千二百九貫目餘、銅一億一萬一千四百四拾九萬八千七百斤餘(但し銅は寬文 以上九ケ條の金銀輸出額は不明であるが、長崎一所の輸出額は正保五年から寳永五年までの六十一年間に金二百 金は六百十九萬二千八百兩餘、銀百十二萬二千六百八十七貫目餘、銅は慶長六年より寬文二年まで

勿論白石の擧げてゐるこの數字をそのまゝに信ずることは出來ない。しかし實際上この時代の金銀の輸出額を明

はいかになるべき事にや、すべて異國の物の中に、藥物は人の命をすくふべきものなれば、一日もなくてはかなふ 五百萬兩らしなふべし、・・・・今より百年千年の後、 くて此後も今迄の事のごとくに、毎年に拾四五萬兩を失ひなば、十年にして百四五拾萬兩を失ひ、 瞭にすることは極めて困難である。

三玉)何れにしても金銀の流出しつゝあったことは事實である。故に白石は、か 述せるところに依つても明瞭である。 し國の寳を失はむ事、返す返すも惜むべき事也」と云つてゐる。三六 べからず、是より外、無用の衣服、翫器の類の物に、我國開け始りしより此かた、神祖の御代に、始て多く出たり ふことは全然出來ない。 白石は金を尊重したことは事實である。しかしそれは違つた意味に於いてゞあることは前 次第に時代も下りて、人の心も俗もうすくなりゆかんには、世 しかしこの議論を目して重商主義的であると云 百年にして千四

豊兩の金は銀にしては六十匁に當り錢にしては四貫文に當てられ候へば凡金の價銀にまさり候事拾二割餘・・・・錢に 示してゐる。そして三貨の比價を示す。「慶長の初に小判を造出され 其重さ四匁八分を以て 壹兩と定められ、・・・・ よりて各々其價を定められ候所歟。。又三種の通貨はおのくしその評價の方法に相違がある。「金は元より其品たつと まさり候事八百四十割・・・銀の價は錢にまさり候事六十四割・・・・これすなはち金銀錢をのづから其品の高下あるに いても自石の鋭い觀察の一端を知り得る。彼は金銀錢通用の事と題し、先づ第一に貨幣の品位を制定すべきことを く候によりて其形の大小を以て用ひ候物に候・・・錢はもとより其品賤く候によりてたゞ其數の多少を以て用ひ候物 最後に白石が金銀錢三貨の性質を規定し、その用途を明かにしてゐる點について述ぶる必要がある。この點に於

新井白石の経済論

一九 (10五三)

=0

皆々銀によりて其及ばざる所を相たすけ候ものに候。」金銀錢三貨はその實際流通上の便益から見て何れも必要なり りして一分一厘の小敷に至る迄道じ用ひられずといふ所なく候を以て、金といひ錢といひ其通じ用ひられ難き所は ・・・銀に於ては其品だつときと賤きとの間にたちて其重さの輕重を以て用ひ候物に候へば、其大數萬貫目と申すよ はたゞ其數の多少を以て用ひ候物に候へば、金にかへ銀にかへ候て通じ用ひ候所に於ては相妨る所なきやうに候へ は其形の大小を以て用ひ候物に候へば、壹兩の金は銀六十匁には通じ用ひ候へども六十一匁の用にも通じ用ゆべか い。唯白石はさらに何が故に三貨併用が必要であるかと云ふ理由を求めてゐる。即ち「金銀錢を通じ用ひ候法は金 貨幣理論を求めんとしたのではない。金錢が計數貨幣であり、銀が秤量貨幣であつたことを指摘したものに過ぎな も相拘らずたゞ其重さの輕重を以て用ひ候物に候。の論これは單に事實を事實として說明したに止まり、それ以上 に侯……銀は金と錢との間にはさまりで其品もとより賤からずまた甚だたつとからず其形の大小にも其數の多少に もとより其品さがりたる物にして其數多きに至つては其質の重きに堪へず候へば通じ用ひ難き所ある物に候

すると白石がこれを便利であるとする理由に、銀がその價格高からず安からず、又何程にても隨意に分割し得る秤 大本とは仕る事に候、これによりて萬物の價も皆々銀を以て相定め候事に候」と述べてゐる。ことししかし少し注意 以上の議論から白石は銀を以つて最も便利なものと認めた。即ち「凡天下の財寳通用の事においては銀を以て其

「然るを多くの新銀ども出來しかば、西方の國々にしては其患殊に甚しければ、彼谷(谷長右衞門安敏)が議せし所 理にあたらざる事共多く相見え候」とまで極論してゐる。三八。從つて貨幣改鑄についても銀の問題が重要である。 共利用ある事をよくわきまへ知り候事は西方の國々の人には及ばす候敷」と述べ、それに註記して、「天下の財寳通 ろしめされ候に至て上方の工商共の移り來り候に隨ひて金銀共に相通じ用ひ候事に習ひ候へども銀の事におゐては つたのである。恐らく當時經濟界の中心たる西國地方が銀遣ひであつたためであらうか。關東の國々も當家世をし 量貨幣であると云ふ點に存することが解る。そして白石は秤量貨幣たることの不便さには何等の注意をも拂はなか 用の大本と申すものは銀の事に候を東國の人はその大本におゐて明らかならぬ所候によりて財用の事を論じ候は共 まづ銀の事をむねと申なり」と記してゐる。ミカン以つて彼が銀に對して如何なる態度を採つたか推測し得るで

當時起つた社會經濟問題の一般に關しては、 前掲拙稿正徳「享保時代の社會經濟論概説」を参照。

註二〇)「折たく柴の記」中卷、全集第三、五七頁。

(註二一) 同上、六〇頁。

(註二二) 前揭論文第六節參照

「白石建議」六、(資料、一九三頁)。「本朝寮貨事略」(全集、第三、六七三頁)にも同様の議論がある。

(註二四) 「本朝寳貨事略」(全集、第三、六七一—三頁)

金三五 竹越與三郎氏はその著「日本經濟史」第五卷二五七頁以下に於いて白石の計算を反駁されてゐる。

C註二六)「白石建識」六C資料、一九四十五頁)。

金田也 中村孝也氏はその著「元祿及び享保時代における經濟思想の研究」六六四頁に於いて重商主義的傾向を有するもの として自石の説を論ぜらる。これに對する本庄榮治郎氏の反駁は正しい。CR政訂經濟史考」三二九頁)。

(註二八)「白石建議」(資料、一九五—七頁)

(註二九) 同上(全集、第六二四六頁)

C註三〇)「折たく柴の記」卷下C全集、第三、一四五頁)

π

八年の間に造出候所の金銀の敷を以て推測候に、慶長六年以來元祿八年に至て凡九拾五年の間に年々造出し候所の 八拾二萬四千三百五拾六兩、其銀の數わづかに貮拾八萬七千六百拾七貫百五拾五匁には過候はず、元祿以來僅に十 慶長の良貨に歸さんと欲した。「元祿以來金銀の法を變じ候事を申行ひ候事當時上の御財用其入り候所を 以て 其出 金銀の敷いかでかこればかりには候べきや、皆是天下の人各其寳を失ふべき事を惜み候て、當時に通用すべきほど 銀をば銅を増加候て、天下通行の金銀の數を増され候由申沙汰し候得ども眞實は慶長以來造出され候ほどの金銀の 候所をはかり候に、其入り候所其出候所の半には及ばず候故に、・・・・慶長以來の金銀の法を改め金をば銀を雑造り、 製其牛を奪ふべきための術にて候き、・・・・しかれども其時天下より出來り候慶長以來の金銀、其金の數わづかに八百 **敷をはかり候て出し替候ひしかば、藏め貯候て出來り候はぬ所の數は、出し替候所の數よりは萬々倍し候べし、いいいいいいい。** 白石は従來行はれてゐた貨幣の改惡に反對であつた。殊に財政救濟を名としての改惡には極力反對し、

災變もしきりに降り候ひしかば、初收め奪はれ候所の金銀悉皆傾け竭され候き、 も其謂なきにはあらず候・・・・下にしては人民の怨み候て、物價もようやくに增し、上にしては天地の心も怒り候て、 然らば當世に通行し候所の金銀其數を增し候ごとくには候へども、 なく、天下の人其苦みに堪ず候のみにあらず、國家の御財用もすでにつまづく事には至り候ひぬ」。〇三〇 しきりに銀法を改め候事五度迄に至り候て、今の新銀造出し候に及び萬物の價一物として增加候はぬものも 却て其數を減じ候ごとくにはなり候と申候はん ...然れども其過を悔ひ改るに及

ない。 新しき金銀の獲得なき限り、 將軍の顧問たる地位にあり、その信任を受けてゐる身として、單に一個の議論を上申するに止めるわけにはゆか そのよしと信ずるところを實行すべき具體案を進言しなければならない。惡貨を良貨に變する手段としては 先づ舊き惡貨を囘收しなければならない。如何なる方法を以つて囘收すべきか、そこ

に少なからざる苦心が存するのであつた。

月五百石を加増されてゐる。今その重秀を彈劾しなければならない。「そのゝち月を追ひて改造りし銀の事ども、世 の人申す所ありて諮物の價も平ならず、此事は、過にし營造の御事と、朝鮮の聘事によれりとぞいふなる、古には 三載功績を考るなど聞えしに、御代つがれし後すでに三とせに及べども、天下の事體、 殊に白石がその實際上の治績を擧ぐる上に人物の適當なる者を必要と考へてゐたから、その苦心は少なからざる 此年(正徳二年)の三月、 白石が最初から奸人として敵視してゐた荻原重秀は財政難の危急を切抜けた功に依り、寶永七年十二 これらの事ども論ぜし封事まゐらせし時に、才あるものは、德あらず、 初政の御時にかはりぬとも 徳あるも

新井白石の経済論

コヨ (10五七)

明れば十一日の朝に、詮房朝臣仰を奉りて、重秀職奪はれし由を告給ひたりけり、三三所謂白石に決死の封事であ ったのである。 の小人用ひさせ給ふ事の御あやまり十條をしるして、九月十日に封事を奉る、我言の激切なるを聞召驚かせ給ひ、 からざる事ども論じ申て、かさねて又封事奉りて勘定所吟味の役といふ職おかれん事を申せし事、・・・かゝる姦邪 **ごときは、才徳二つながら取べき所なし、しかるをなほ徳あらざれども、其才ありと思召れん事、もつとも然るべ** 秀が人となり、しらざる所にはあらずと、答仰らる、古より此かた、真材の得がたき事は申すにも及ばず、 のは才あらず、真材誠に得がたし、今に至りて、天下の財賦をつかさどらしむべきものいまだ其人を得ず、年比重 重秀が

之候敷、一には金銀共に慶長の法のごとくにあるべく候、二には上の御費を惜まるべからず候、三には下の利を奪 はるべからず候、四には此事にあづかり候役人を撰ばるべく候、五には誠信を失はるべからず候」 事は本にて候、其本立候はずしては、其末行はれ候事はあるべからず候、某愚存の及び候所其本たるべき事五つ有ゝ 單に儒教的影響とのみ見るべきではない。「金銀の法改らるべき御事、其法を論じ候は末にて候、先其道を論ずべき かくる人事的關係の存してゐたことが、彼をして貨幣改鑄事業の根本として人間を重要視せざるを得なくした。

より小人の利を謀り候者共に候へば、もし其上にたち候人々の中清廉の操なきもの一人も候はんには必らず其下に れ候はんには、金座銀座の輩を始て、多くの町人共をして其事にしたがはせず候てかなひ難く候、此等の類はもと 彼が特に人撰を嚴にする必要を認めた理由は利を專らにする町人と接觸する者だからである。「金銀の法を改めら

の町人觀の一端をも覗ひ知ることが出來よう。 然らばたとひ其才略はなく候とも、其操清廉にしてよく其法を守るべき人々を撰ばれ候にはしくべからず候」。又彼 姦計を以て貪利を競爭ひ候て、共禍天下の人民に及び候て、上の御德意行はれざる所出來候べき歟、

ついてはすでに多く紹介されてゐるものではあるが、簡單にその要領のみを述べて置かう。 これに闘する種々なる意見が行はれてゐた。白石は一々それ等の說を論駁して、自己の說を樹立した。その方法**に** 然らばその實行方法として、白石は如何なる手段を進言したか。當時貨幣改鑄の必要はどの方面からも認められ、

即ち惡貨をこれと引替へる。他方關東と關西とで錢を鑄改し、これを以つて銀鈔、即ち札と引替へ、札は燒きすて 新しく良銀を作る。かくて以上の材料に依つて相當銀貨が鑄造され得たら、第二段の方法に移る。新造された上銀 を最初惡質の新銀と引替へた銀鈔と交換するのである。しかし全部の銀鈔を引替し盡すには上銀が不足であらうか 白石は紙幣を利用して何囘にも引替を行ひ、漸次に惡貨を良貨に引替ようとするのである。即ち最初に金銀錢の その不足分は新しく發行する第二囘の銀鈔と交換する。以下との方法を繰返すのである。 さらに金銀銅を生ずる山を開發し、又それ等の私賣を嚴禁する。又最初に引替へられた銀は全部銅を吹きわけ、 江戸と大坂とに引替所を設置する。始めは銀凡六十六萬貫目に相當する銀札を作り、元祿以來の新銀、

金貨の場合も同樣である。そして「金の引かへは大かた三度にて事終る」と考へたのに對し、 銀の方は四囘、 叉

「事の體により候て五度は引かへられ候事もあるべく候敷」と述べてゐる。

新井白石の經濟論

二五 (一〇五九)

じ候法を嚴にたてられ候事に候これ一つ。。以つて一般を推察されたい。CEIEO 質施に關する注意を儿ケ條擧げ、その第一には紙幣(銀鈔) に關する注意を述べてゐる。「金銀をだに僞造候事に候 極めてゐる。全部十項目からなり、各項についてその法意と實施の次第とを細密に記述してゐる。例へば第一項の へば、まして鈔をば偽造候事候につきて、鈔を造候には其法も候て偽造候事もなり難きやうに造出し、又偽造を禁 白石のこの引替方法は上記の要領のみを以つてしては頗る簡單であるが、建議に規定さることころは頗る詳細を

は吉宗を待たなければならなかつたのである。 日家宣薨じ、遺命として金銀改鑄を命ぜられたが、白石の政治的事業としてこれを見ることが出來す、 は當然ではあるが、又彼の熱心なる努力とその能力とは十分に評價さるべきであらう。 責任ある地位にあり、又直ちに實施される可能性の頗る多い場合、あらゆる方面に周到の注意を拂つて建言するの この白石の建議は如何に白石がかくる法制的才能をも有してゐたかを十分示すに足るものである。勿論彼の如く 不幸にしてその年十月十四 實際の施設

〈註三一〉「白石建識」四、〈全集〉第六、一九二十三頁〉

註三二〇「折たく柴の記」卷中(全集、第三、一二二一三頁)

金三言 上掲の貨幣改鑄の方法に關する引用は、すべて「白石建議」五、〈全集、第六、二〇八頁以下、資料、一八九―一九二頁〉

Ħ.

白石が荻原重秀を退け、貨幣の改革を行はんとした根本は何處にあるか。 それは自傳「折たく柴の記」の中にも、

然御事に候、」(三四)「前代の御末に城北に御所つくらるべきにて、此事奉行の人々其材をもとめしに、得る所なかり 翫器等の類は多くたくはへをき候て、兵具等の數は備らず候人々も有」之など風聞し候へば、たとひそれ迄の事はな 又多くの建議の中にも現れてゐるやうに、當時の武士社會の隨落腐敗、並びにそれに伴ふ經濟的困窮である。「近世 掌の中にせしによりて、 に至ては其軍役のほどの人馬等の事は沙汰に及ばず、歌うたひ舞まひ候女などの數多く集めをき、花木魚鳥その餘 ではなかつたのである。否白石自身すらもすでに變質された武士であつた。彼等の中職にある者は事務官たるを要 改造りしがために、重秀わかち得し所は、金およそ二十六萬兩に餘り、その家從長井半六といふもの、金六萬兩を きものは、其價も貴く、商人どもの得る所の利も多ければ、重秀もまた其財をわかち得し所すくなからず、・・・・銀 しかば、重秀に仰下されしに、日あらずして多くの良材もとめ得てまゐらす、 く候とも、 く元祿期の後を受け、元祿文化の洗禮を受けた武士階級はすでに元龜天正の血の洗禮を受けた德川初期の武士階級 更才が必要であり、非職の者は有閑知識階級となってゐたのである。 其餘古畵珍器の類は、ことんしくにしるすにいとまあらず」(宮玉)とれ等の記事に依つても明かなるが如 江戸廻引つれ候ばかりの人も候へば、事濟候事のごとくに心得られ候人も出來候はんには尤以て不」可と 天下の富商等、あへて此人の心にたがふものなかりしがゆゑなり、ましてや、當時得がたとれは重秀年どろ天下の利権を

張り時代の兒たることを冤れることが出來なかつたのである。彼の理想の實現は云はゞ元祿文化の延長に外ならな 白石の政治的理想は禮樂を中心とする宮廷文化の移植にあつた。その點に於いて彼は矢

新井白石の經濟論

14 CC C

關係を無視せんとしてゐる。それならば白石は何處に武士困窮の原因を求めんとしてゐるのか。 文弱な要素を强め、又多くの經費を要するものであつた。白石はこの矛盾を認めない。新文化の發展と財政難との文弱な要素を强め、又多くの經費を要するものであつた。白石はこの矛盾を認めない。新文化の發展と財政難との ある。「鬼」と呼ばれたのも畢竟時勢と共に移り得ぬ彼の氣質のためであつたらう。さらに白石の理想は非武士的な、 潔白さと氣慨とを有する者であつた。かくして彼の理想の實現はかなり多くの困難に遭遇せざるを得なかつたので 唯彼は依然として前代の武士としての教養を受け、これを選奉する者であつた。武士としての節義を曲げ得ぬ

は一に政道の如何にかゝる。封建的干渉政策に依つて世の風習を一變せんとするのである。一言にして云へば節約 と云ひ、元祿の好況が商人階級に好影響を與へたことを指摘してゐる。要するに問題は武士の財政困難にある。 をうしなひ候と申す事にもあらず」と云ひ、物價騰貴も「商賣人のためには皆々其便よろしき事共とは罷成り候敷」 等を以つて「天下の上下大に財用とぼしく成來り候とは申すべからず、武家の財用とぼじく成候とは申すべく候」と し難い。しかし「世の風俗にひかれて貧窮に及び候人と、其行修まらずして貧窮に至り候人とは「救濟出來る。それ く」なつたことに歸してゐる。換言すれば物價騰貴、天災、奢侈の三つに歸してゐると見られる。しかも彼はこれ 此等の事につきて諸物の價高くなり、或は地震砂降候等の變により、 然らば彼は如何なる救濟策を提供してゐるか。以前に一言したるが如く、天命に依つて貧窮なる者は如何とも致然らば彼は如何なる救濟策を提供してゐるか。以前に一言したるが如く、天命に依つて貧窮なる者は如何とも致 白石は武士の困窮を來たした原因を、普通唱えらるゝもの、「或は金銀の品あしくなり、或は運上 の 事出來り、 例へば運上の如きも、運上を出し候ほどの者共はその賣出し候物にそれほどの價を増し候へば、其利 或は風俗結構の事多く、或は男女召仕の人少

CEも)等を擧げてゐる。云はゞ思ひつくまゝに列擧したに過ぎない。CEA)殊に經濟上より見れば、全く無策に等し である。無用の贈答饗應を禁じ、至六)在番及び遠國御使の浪費を省き、その他衣食住の無用の雜費、浪人つきあひ

、、甚しく消極的であると云はざるを得ない。

ゐる。又それが武士階級の經濟的困窮を來たした原因の一つとしてゐる。しかし良貨への改鑄と武士の財政難救濟 陳腐な議論以上に出づること出來なかつたのである。 のであつたとしても、一步を護らざるを得ない。要するに白石は財政救濟の問題に關する限りに於いては、 との理論的聯關を少しも述べてゐない。この點に於いては荻生徂徠の徹底的な議論に、假令それが實行不可能なも 白石は元祿の改鑄が經濟界の混亂を生じ、又その混亂に乘じて一部の町人が利益を獲得したことを明かに認めて

(註三四)「白石建議」」、(資料、一八二頁)

(註三五) 「折たく柴の記」中、(全集、第三、一一一頁)

奉獻減少の建議は實際には行はれなかった。「奉獻の事は、上をうやまひまゐらする心を行ふところなり、またむ かしより度しげく戯る事は、その家々の眉目ともし侍るなり、 かたぶけ申人有しなり、さることはりもこそあるらめ」(「折たく柴の記」卷中、全集、第三、九九頁)。 しかるをこれらの御沙汰に及ばんはもつともしか

C註三七) 「寛永の比人々浪人につきあひ候事は、ふるき軍物語をも開候て後學にも仕るべきためも候き、猶それ等の事をだ 時勢の赴くところ如何ともなし得なかつたのである。 に御伽禁も其謂ある御事に候處に、今の世の浪人につきあひ候人々は或は利用のため、或は淫欲のために候へば、

新井白石の經濟論

二九 (10六三)

皆々可然事とは申すべからず候」。對浪人觀の時代的相違は注意する價値がある。

以上の財政救済に闘する部分は、普通「庶政建議」と呼ばる」「白石建議」「、〈資料、一七五―一八七頁〉より引用。

÷

を百年に待つ意氣を有してゐた。從つて直接當時の社會經濟に論及すること殆どなかつた。 書き送れるが如く、深く世に韜晦せんと欲してゐた。しかしなほ「此上は百千年後のためのみに候へば」とて、知己 得たであらう。晩年彼が政界を退いて後は、「何卒なにもしらぬ老人に見え候へかしとたしなみ候」と佐久間洞巖に れる。彼の學識と才能とを以つて、第三者の立場から當時の社會經濟狀態を批判したならば、もつと多くの收穫を なかつたとは考へられない。あるひは徂徠、春臺等と共に、大いに政治經濟論の大著述を後生に遺し得たかも知れ ことがなかつたなら、彼は經濟論をしなかつたかも知れない。しかし彼ほどの野心を有する者が全然經濟論に觸れ ぎない。それは遇々家宣の知遇を得て、實際政治に參與した結果生じたものに過ぎない。もし彼が政治に參劃する う。勿論それは貨幣改鑄の事業に附隨して生じたものである。又白石の經濟論は彼の學問的事業のほんの一部に過 以上私は白石の經濟論を大體紹介し得たつもりである。白石が最も力を注いだのは恐らくその貨幣論であつたら 彼があまりに密接に實際政治に接近し過ぎてゐたゝめに、却つて徹底せる議論を聞き得なかつたやうに思は

に理解し得なかつた。從つて進步的にも、反動的にも、 從つて經濟學者としての白石は決して最高位を占むる者ではない。新しく來たらんとする經濟狀態の潮流も十分 新經濟思想への寄與はなし得なかつた。唯彼の經濟論の特

徴は當面の經濟問題に對し、實踐的であった點だけである。

會思潮に甚だ大なる功獻をなしたのである。何故に保守的な禮樂主義者がこの功獻をなし得たか。それは彼の有す 然るにその白石がやがて新時代潮流の先驅的役目をなしつゝあつたのである。彼の西洋學、彼の史學は彼以後の社 事をは十たびし、 びなせし事は、前にもしるせし事の如く、つねに堪がたき事に堪ふべき事をのみ事として、世の人の一たびし給ふ の記」に、「されば學文の道において、不幸なる事のみ多かりし事、我にしくものあるべからず、かほどまでにも學 る熱烈なる知識欲の力に依つてゞある。その死するまで少しも倦むことなき努力に依つてゞある。彼が「折たく柴 やがて幕末に於ける國學者の復古的運動にも、又洋學者の科學的研究にも、その系統を辿ることが出來る。唯經濟 白石の社會に對する態度は何れかと云へば保守的である。その點に於いて典型的な儒者と何等變るところがない。 十度し給ふ事をば百たびせしによれる也」と記してゐるが、この白石の努力は室しくなかつた。

(昭和八年七月二十四日稿)

論に限定する時、白石の議論はあまり高く評價し得ないものである。